様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 ３０ 日現在

機関番号：３３７０７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０４２７０

研究課題名（和文）伊勢湾台風被災者支援と女性生活運動の地域社会史：ヤジエセツルメント保育所を中心に

研究課題名（英文）The Process of the Women's movement: Focusing on the Yajie Day Nursery of the Isewan-Typhoon

研究代表者
平野　華織（HIRANO, Kaori）

中部学院大学・教育学部・准教授

研究者番号：６０４５４３０２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、災害等の非常時の保育実践における事例の１つとして、1959（昭和34）年９月の伊勢湾台風被災後に名古屋市南区弥次衛町の応急仮設住宅内で無認可の臨時託児所として出発したヤジエセツルメント保育所での取り組みを取り上げた。分析対象としたのは、調査の過程で新たに発掘したガリ版刷りの園だより『レンガの子ども』や文集『レンガの子ども－母親特集号－』などの１次史料である。後年何度も版を変えて発行された単行本『レンガの子ども』には収められていない記録等も数多く見られるため、同書の記述だけに基づいてなされた先行研究を批判的にとらえ、女性生活史の立場から新知見を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、まず、「平常時」ではなく、「非常時」における実践へと着目し、「問題史」的アプローチを試みていくものである点に学術的な特色がある。その姿勢は、「非常時」における福祉・保育の実践的な対応を過去の優れた取り組みから学び、歴史的検証を通して、今日的意義を抽出することを企図しており、「現在進行形的な取り組み」を追う現状分析に終始するものでも、過去に起きた出来事の整理にとどまるものでもなく、「過去形を現在形及び未来形につなぐ取り組み」として、歴史的価値を「総合」的かつ「融合」的な探究を行った。

研究成果の概要（英文）：This paper analyzes the childcare movement for the establishment of the Yajie Settlement Day Nursery in Minami Ward, Nagoya City, after the area was struck by the Isewan Typhoon in 1959.
A copy of a memoir entitled "Renga no Kodomo" ; written by Hahaoya Tokusyuugou ; has recently been discovered in the library of the Yajie Settlement Day Nursery. Parents hoped that their requests for a nursery would help them to cope with the problems caused by the natural disaster. The effective childcare movement benefited the community’s children and helped in the organization of work to promote recovery.

研究分野：保育運動史

キーワード：女性生活運動　保育運動史　伊勢湾台風　セツルメント　名古屋保育問題研究会

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

1959（昭和 34）年 9 月 26 日の伊勢湾台風被災後、名古屋市南区弥次衛町の仮設住宅にボランティアの手で臨時施設として敷設されたヤジエセツルメント保育所については、保母であった原田（旧姓：及川）嘉美子・河本（旧姓：難波）ふじ江及び名古屋保育問題研究会（保問研）の編著による実践記録集『レンガの子ども』から取り組みの内容をうかがい知ることができる。また、同保育所に触れた論文等は多く、当事者の宍戸健夫や土方康夫、浦辺史らによって先鞭がつけられ、上笙一郎・山崎朋子、中村強士らが後に続く形で、保育学研究の立場から分析・検討がなされてきた。さらに、近年では、女性史の立場から伊藤康子が、社会福祉運動史からは浅井純二が論文をまとめている。

しかし、それら先行研究は、浅井のものを除けば、分析・検討の対象を公刊された実践記録集『レンガの子ども』に据えているものが大半を占めており、取り組みの周辺・背後に伏在していた貧困・差別・産育・文化などの生活問題を著しく捨象してしまっている。すなわち、名古屋保問研の関係者によってまとめられた資史料の枠内で実態把握を行っているため、いわば「保問研史観」に縛られてしまい、被災者の生活課題や心性・出来事をめぐる多層の歴史過程が押さえられていない。

本研究においては、自他の先行研究を批判的にとらえ、分析・検討の視点の狭さや資史料の調査不足を改善するため、あえて全く別次元の歴史過程・対象に着目する研究方法を適用し、旧来の枠組みから抜け出す視座へ身を置く。その内容的立場は、次の２点に集約できる。

第１に、「女性独自の行動力」（伊藤康子）としてとらえなおし、言わば「失敗の女性生活運動史」という負の側面も押さえる点である。社会福祉研究者の一番ヶ瀬康子は、戦後を扱った「運動史の多くが、いわゆる成功のそれのみに、かたよりがちであ」り、「挫折あるいは失敗のそれが、史料的にも見出すことが困難なためでもあろうが、ともすればかくされがち」であったし、「成功あるいは失敗いずれも、その条件と原因あるいは問題について、可能なかぎりより正確に記す努力」が必要であると指摘していた（同『社会福祉著作集　第２巻　社会福祉の歴史研究』労働旬報社、1994 年、p.303）。本研究においては、そのような一番ヶ瀬の指摘にも学び、男性研究者や当事者から「成功」面の評価だけに偏りがちであった「保問研史観」を相対化した上で、保育実践などの再検証・評価を試みる。また、それは伊藤の女性史研究で中途半端な評価にとどまったものを深化・発展させる立場ともなる。

第２に、「地域社会史」の手法を意識的に採用するという点である。教育史研究者の中内敏夫は、歴史叙述に関する新たな研究手法として、為政者・役人・教師らによる「意図されたもの」としての歴史ではなく、子ども・保護者らによる「生きられた歴史」へ目を向けるべきだとし、「教育の社会史」の必要性を提案した（同『新しい教育史――制度史から社会史への試み』新評論、1987 年、改訂増補版、1992 年）。本研究では、そうした中内の顰みに倣い、1960（昭和 35）年前後の社会制度にも目を配りつつ、名古屋市南部地域における民衆生活を記録した文書や物質文化、存命者の記憶（口述（オーラル）資料）などを積極的に収集・整理し、セツラー・保母・研究者の「意図」だけに偏った叙述へと陥ることなく、被災者・保護者・子ども・女性によって「生きられた歴史」も描きたいと考えた。

２．研究の目的

本研究は、伊勢湾台風（1959（昭和 34）年 9 月 26 日）の被災後、名古屋市南区弥次衛町の仮設住宅に臨時施設として敷設されたヤジエセツルメント保育所の各種実践を取りあげ、高度経済成長初期段階の社会・地域・家族の構造的変動や被災による生活基盤の破壊など、その実践の深層に位置づいていた生活世界の生々しいドラマへと切り込む社会史的叙述を試みるものである。

こうした本研究の特色は、名古屋保育問題研究会の関係者の手でまとめられた資史料の枠内で実態把握されてきた先行研究をあえて批判的にとらえ、女性生活史及び地域社会史の立場から新知見の提示を企てる点にある。

３．研究の方法

本研究における当初計画では、ヤジエセツルメント保育所発行のガリ版刷り通信『レンガの子ども』 や文集『レンガの子ども――母親特集号』などの一次史料のほか、「ヤジエセツルメント保育所 後援会報」等の一次史料も収集し、また、保育所の開設・運営に関わった保母や 学生セツラー、東京・名古屋保育問題研究会会員、いずみの会会員ら、特に女性当事者にインタビュー調査を行う計画であった。しかし、緊急事態宣言等の社会情勢の影響による移動制限により、当初の計画通りに研究を遂行することが困難となった。そのため、先行研究の調査、収集を精力的に行うことから、ヤジエセツルメント保育所がたどっていく興廃のドラマを新たな視点から描き出し、そこでの取り組みが内包していた意義と限界を抽出するよう取り組んだ。

４．研究成果

(1) １年目の計画は、関係する文献等の調査・収集を精力的に行い、伊勢湾台風被災者支援活動の全体像、ヤジエセツルメント保育所による各種実践の輪郭を把握した。また、その研究成果の中間報告の公表も行った。

初年度の研究で分析対象としたのは、研究代表者が研究ノートを作成する過程で新たに発掘した、ヤジエセツルメント保育所発行のガリ版刷り通信『レンガの子ども』や文集『レンガの子ども――母親特集号』などの一次史料である。後年５回版を変えて発行された単行本『レンガの子ども』には収められていない文書（特に、母親自身による記述）等が数多くみられるため、関係する文献の調査・収集を精力的に行い、ヤジエセツルメント保育実践を取り巻く当時の生活世界の輪郭を把握した。

また、保育所の開設・運営に関わった保母や学生セツラー、東京・名古屋保育問題研究会会員、いずみの会会員ら、特に女性当事者に関わる資料を収集することで、単行本の記述だけに基づいてなされた先行研究の限界を克服しようと試みた。

さらに、伊勢湾台風発生当時の災害記録、行政資料（名古屋市女性会館、名古屋市南図書館、伊勢湾台風記念館等）、新聞雑誌記事の閲覧、複写をし、復興支援に関連する膨大な文献を調査した。

(2) ２年目は、それまでの成果を踏まえ、ヤジエセツルメント保育所保母の原田嘉美子・難波ふじ江らの保育活動を支えた東京保育問題研究会の乾孝や畑谷光代、宍戸健夫、浦辺史、土方康夫ら、関係会員の保育思想・保育理論に関する検証を進め、高度経済成長初期段階の社会・地域・家族の構造的変動や被災による生活基盤の破壊と再生過程が同保育所にもたらした影響と矛盾構造についても分析した。

具体的には、ヤジエセツルメント保育所実践を支えた東京保育問題研究会会員である乾孝や畑谷光代、宍戸健夫らの保育思想・保育理論と、高度経済成長前夜の保育運動史に関わる論稿・記事などの調査・収集を行った。

また、太田素子監修『戦後幼児教育・保育実践記録集（全Ⅲ期・全 27 巻）』（日本図書センター、2014 年-2015 年）など、戦後保育実践史に関する著作物（原本・復刻版）の調査・収集も行い、同保育所の実践を取り巻く保育界の全体的な動向を押さえた。さらに、1959 年から 1960 年代前半にかけて、伊勢湾台風被災後の愛知県名古屋市南部地域の生活史や女性史に関わる資史料を調査・収集し、その整理・分析を行い、高度経済成長初期段階の社会・地域・家族の構造的変動や被災による生活基盤の破壊と再生過程の全体像を把握した。

(3) ３年目以降は、１年目及び２年目における研究成果を踏まえながら、高度経済成長初期を名古屋市南部地域の保育運動に関わった人々がどのように生きたか、同保育所による保育運動が内包する正・負両面の遺産をあぶり出し、研究成果を学会誌への論文投稿の準備を行った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 浅野　俊和	４．巻 ３（１）
２．論文標題 「集団生活の発達」を軸とする保育計画～三木安正編『年間保育計画』（1958年）が戦中期の保育研究運動から受け継いだもの	５．発行年 2017年
３．雑誌名 教育実践研究	６．最初と最後の頁 1-13頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 平野　華織
２．発表標題 伊勢湾台風被災者支援と女性生活運動－ヤジエセツルメント保育所実践を中心に－
３．学会等名 人間福祉学会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	浅野　俊和 (ASANO Toshikazu) (00300351)	中部大学・現代教育学部・教授 (33910)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関